

---

# ある悲劇の話

barth

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある悲劇の話

### 【著者名】

NOEL M

### 【作者名】

bartn

### 【あらすじ】

戦争に巻き込まれた一人の剣豪。

重なる罪と殺戮の果てに彼が見たものとは……

さて。

皆様の目には、このモノガタリはどう映るでしょうか？  
悲劇なのか、それとも

「全く。 なんで、 こうなったんだろうな？」

そう言って、 男は笑った。

酷く楽しそうに。 懐かしい顔で。

今から五年前、 戦争が始まった。

元々関係の危うかつた隣国同士のいざいざはあつといつまに全面戦争へと移行し、 そして。

リズは徴兵された。

流行らない剣術道場の師範だった落ちこぼれば、 あつという間に中流階級の年収と同じだけの金額を稼ぐことになった。

国のために。

王のために。

そんな建前を振りかざして上司は言つ。

殺せ

奴等を殺せ

斬つた。

何人、 何十人、 何百人。

生きるために斬つた。 殺すために斬つた。 国のために、 人を

殺した。

それまで虫も殺さぬ善人だつた筈が、 気が付けば大儀の名の下に血で血を洗つていたのだ。 何とも傑作じやないか。

あつという間に十七部隊の隊長に上り詰めたリズは、 軍の施設で

とある噂を耳にした。

敵国の將軍に、平民からのし上った化物が居る。

何となく聞いていただけの噂だつたが、何の悪戯か。  
そのすぐ後についた作戦で剣を交えることになつたのが、その化  
物の率いている隊だつた。

殺した。

いつもの様に。

向かつてくる敵を斬り、味方が斬られたらその倍の敵を斬り。  
一切の容赦なく、振り返ることもなく、ただひたすらに突き進んだ。  
気が付けば、残っている味方は自分一人。

だが、それがどうした？

自分しか残つてないなら、自分一人で斬ればいい。  
幸い敵も、残っているのはあの化物だけだ。

「……リゼニア、か？」

本当。 一体何の悪戯か。

平民からのし上った將軍、稀代の化物、敵国の英雄。

「ラトリクス……？」

かつて共に剣術を学び、同じ飯を食い、同じ誓いを交わした盟友  
が、いつの間にかそこに立つていた。  
いや、違う。

始めるから、だ。

「はは、なんだよ。敵に平民から貴族階級までのし上った化けモノがいるって聞いたことはあったが、な」

どうやらリズとそう変わらない噂を耳にしていたらしくその男は、三年前から連絡の取れなくなっていたリズの兄弟弟子。

だが、再会の喜びはない。

お互い血に塗れて、お互い人殺しで。お互い、昨日まで自分と隣で一緒に笑っていたであろう味方の誰かの血で染まっている。何かを守るために学んだはずの剣術で、奪いつくした代償がこれだ。

カリサマといつものま、つぐづぐ悲劇がお好きらしい。

「……」

「やつだよな、やつぱ」

ラトリクスが苦笑を漏らす。  
故意にする必要など無い。気が付けばもう、リズの腕は剣を構えて狙っている。

誰を？

決まっている。  
目の前の敵を、だ。

合図は無い。

互いに呼吸が整った瞬間が始まり。

「ツ！」

踏み込みに一秒は掛からない。

慣れた動作で突き出した剣先が、ラトリクスの頬を浅く裂く。

「……イ」

頬から血飛沫を上げて尚踏み込んできたラトリクス。リズとは反対側で横に構えた刃をぎりつかせながら、歯を剥き出したその顔は勝利を確信していた。

「甘い」

「！？」

刹那。

風の音のような囁きを聞いた気がしたが、その時に止まつ

「セツ！？」

彼の身体は動いていた。

目前に見えた勝利からの余裕か。 その時思わず漏れてしまつた声。

「ちつ」

忌々し気な舌打ちが、リズの口から響く。

「忘れてたぜ、お前の得意技……」

それとは対称に苦々しげな笑みを浮かべているのは、九十度向きを変えて彼の剣を受けているラトリクスだ。

突きと見せかけて、実は薙ぎ。

田で追つことすら叶わない神速の突きは、踏み込んできた相手を確実に仕留める。

そして、仕留められなかつた場合、相手は油断する。

避けた、と。

それこそが、剣豪リゼニア・ベルフォネットをここまで生き残らせてきた、決定的な瞬間だとも知らずに。

「やっぱり、君には効かないか」

「お前の言葉がなきや、正直腕の一本くらいは持つてかれてただろうぜ」

横に振り切る最中に止められた刃と、それに十字に重なるよう叩きつけられた刃が、互いに震えてゆく先を塞ぐ。

拮抗しているかに見えたのは一瞬。

互いに重心を変えた刃は流れるように相手の剣を滑り、

「おらあっ……！」

切り返したラトリクスの刃が僅かに速度で勝り、リズの姿を下から縦に切り裂く。

だが、どういうわけか、既にリズの姿はそこには無い。

「なつ……!？」

切り返すのではなく、敢えて勢いのまま一回転。

眼前に敵が居るというのに目を離す愚か者など考えられない。だが、その考えられない行為は確実に、速度だけを考えた刃の射程を僅かに上回ったのだ。

衣服を掠めただけの刃は元から方向転換など考えてはいない。

打ち出された剣は、僅かな手ごたえだけラトリクスに残して斬り上がり、

「ふつ！」

真横から来た衝撃であっけなく彼の手から離れていった。

「なんだよ、俺の負けかよ……」

眩きと共に、ラトリクスはリズを見る。

振り上げられた剣。 血に塗れた容姿。 昔の仲間。

「全く。 なんで、こうなったんだろうな？」

そう言って、田の前の男は笑った。  
酷く楽しそうに、懐かしい顔で。

「さあな？」

「最後に一つ、聞かせろ」

「なんだよ？」

てつまつこのまま斬られるかと思っていたラトリクスが意外そうに、感情の色を失った友の田を覗く。

「なんで、手を抜いた？」

リズは、震えていた。

悲しみ？

いや、違う。 まるで逆だ。

「……さあな？」

ラトリクスは答えない。 それがまた、リズの感情を逆撫である。

リズは手を抜いていない。

戦場でいつも通り、田の前の敵を切り殺すだけだ。

全力で、無慈悲で、圧倒的なまでに。

なのに、この目の前の男はどうだ？

まるで殺気が無い。

大方この男のことだ。 どうせ友人だから、なんてつまらない理由だろう。

仲間を殺したくせに！ 仲間を殺されたくせに！ 戦場に立つているくせに！！！

人間らしい感情が、この上なく腹立たしかった。

傑作じゃないか。

今まで殺したくて人を殺したことなどなかった。 そんな中、初めて殺したいと思った相手が親友だなんて。

本当に、カミサマというものは、つづづく悲劇が好みのようだ。 だったら、最高の悲劇を味あわせてやる。

「……ハアッ！…」

かざしていた腕を振り切った。

硬質な剣を通して、確かな手ごたえが彼の掌に伝わって来る。 硬いものにぶつかった、あの鈍い感触が……

「……いつつてええええええええええええええ……？」

ラトリクスが、吼える。

頭蓋に打ち付けられた剣の感触に。

真横にした剣の腹で、思いつきリアタマをぶん殴られたが、故に。

「ふん、それくらい我慢しなよ」

「いや無理だろ！ 鋼だぞそれ！？」

頭を抱えながら「ぐるりと転がる」ラトリクスを横目に、リズが大きく溜め息を吐いた。

本当、大した代償だ。

この戦が終われば、大貴族の娘との婚姻も決まっていた。 何より敵の英雄將軍を倒したとなれば、その報酬は計り知れない。

その全てを分投げてやるというのだから、これくらいは我慢してもらつてもバチは当たらないだろう。

そんなことを考えながら、リズは剣を鞘に収めた。

「ラトリクス」

「あんだよ？」

「この戦争を始めたのは、誰だつたか君は覚えてる？」

「ふん、そう来なくちゃな」

大きな目でぱちくりと瞬きした後、ラトリクスはにいつと笑った。 その顔に、何やらまんまとしてやられた感を覚えながら、リズの眉間にしわが刻まれる。

本当、どうかしている。

剣を交えた瞬間に分かつていた。

目の前の男が、決して化物なんかではない事が。  
少なくとも、自分との戦いでこの男は手を抜いた。

手を、抜くことができた。

そう思つたら、なんだか全てがバカらしくなつたのだ。  
戦争も、人殺しも、何もかもぶん投げて踏みつけてやりたくなつたのだ。

そんなものの言いなりになつてへこへこ付き従つていた、忌々しい十七部隊長も。

「おい、ぐずぐずすんな。 おいてぐぞリズ」

「ふふ、もう一発、いつとくかい？」

ぎやあぎやあとわめきながら、一人の男が戦場を後にする。

一人は、化物將軍ラトリクス。

一人は、悪魔の十七部隊隊長リゼニア。

ここに居るのは、後にお互い、両国の国王となる二人。

「とりあえず、まずは俺のほうからやつていいくか」

「はあ、本当どうかしてるよ。 たつた一人で両国に喧嘩を売りに行くなんて」

「ま、なんとかなるだろ」

ラトリクスが笑う。 それにつられて、

「全く。 なんで、こうなったんだろうな

そう言つて、男は笑つた。

酷く楽しそうに。 懐かしい顔で。

(後書き)

わくわくと書いてみた短編です。  
評価など頂けたら、作者がたいそう喜びます。w

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0658m/>

---

ある悲劇の話

2011年10月5日00時31分発行